

天神山下遺跡Ⅰ

(昭和56年度発掘調査概報)

1982

清水市郷土研究会

序 文

静岡市と清水市の中央にある有度山周辺には、縄文時代の有名な天王山遺跡をはじめとして、数多くの遺跡が存在します。

天神山下遺跡は山麓東側の北矢部地区にあり、この地域では、以前から広範囲にわたり、遺物の散布地として知られておりました。

しかし、遺跡は有度山から流れ出る大沢川の扇状地に埋れ、その範囲、内容については、最近まで不明のままでした。

近年、この地区まで宅地開発の手が及び、清水市教育委員会では、昭和56年秋、遺跡の確認調査を行い、この遺跡は弥生時代末から古墳時代末までの遺跡であることが明らかになったため、ここにその成果を公刊するはこびになりました。

このささやかな冊子が郷土の貴重な歴史文化の継承に役立てば幸いに思います。

昭和57年 3 月

清水市教育委員会

教育長 油 井 猛 治

例 言

1. 本書は、昭和56年度「飯田遺跡ほか発掘調査事業」として、国および静岡県の補助金を得て、清水市教育委員会が実施した、天神山下遺跡の発掘調査概報である。
2. 発掘調査は、中西道行(清水市教育委員会)と杉山功(清水市教育委員会)を調査担当者として実施した。
3. 資料の整理は、実測、図版の作成を中西が行い、トレスは大川敏夫(清水市教育委員会)が行った。また、佐藤秀作、望月清仁、小長井保、佐藤由美子、望月真知子、松本一男諸氏の協力を得た。
4. 本書の執筆は全て中西が行った。
5. 本書の編集は中西が行った。
6. 発掘調査にあたっては、清水市北矢部土地区画整理組合理事長鍋田博氏はじめ土地所有者各位には、文化財保護に対する深いご理解と調査に対する協力が得られた。深く感謝の意を表したい。
7. 調査の資料は全て清水市教育委員会に保管されている。
8. 本調査に関する事務は全て清水市教育委員会社会教育課職員が行った。

目 次

I 調査に至る経過	1
II 遺跡の位置、地形及び環境	1
III 発掘調査の概要	
1. 調査区の設定及び調査の方法	6
2. 調査の経過	6
3. 層位の観察及び遺物の出土状態	9
III 遺 構	
1. 溝状遺構	14
2. 小穴群	17
3. 土 壇	21
4. 凹地状遺構	21
V 出土遺物	
1. 第V層出土土器	22
2. 第IV層出土土器	24
3. 遺構内出土土器	24
4. 各区出土土器	26
VI 考 察	29

挿 図 目 次

第1図	天神山下遺跡位置および周辺遺跡分布図	2
第2図	天神山下遺跡地形図	7
第3図	土層概念図	9
第4図	グリット配置図	10
第5図	天神山下遺跡土層図(1)	11
第6図	天神山下遺跡土層図(2)	12
第7図	天神山下遺跡土層図(3)	13
第8図	SD05実測図	14
第9図	SD01実測図	15
第10図	SD06・SD07実測図	16
第11図	SP15~20実測図	18
第12図	SD02・SD03・SP01~12実測図	19
第13図	土壇実測図	20
第14図	凹地状遺構実測図	21
第15図	第V層出土土器実測図	23
第16図	第IV・V層出土土器実測図	25
第17図	遺構内出土土器実測図	27
第18図	各区出土土器・土埴実測図	28

表 目 次

第1表	有度山周辺遺跡地名表	3
第2表	ビット計測表	17

図版目次

- 図版第1 A 遺跡近景(南より)
B 遺跡近景(西より)
- 図版第2 A S D01(東より)
B S D01(西より)
- 図版第3 A S D05
B S D06
- 図版第4 A S D06、S D07(南半部)
B S D06、S D07(北半部)
- 図版第5 A S D04
B S D08
- 図版第6 A S D10
B S D11
- 図版第7 A S D11北半
B S P34・35
- 図版第8 A S D02、S D03、S P01～S P12
B S P05～S P12
- 図版第9 A S P17～S P20
B S P21～S P25
- 図版第10 A S P06、S D07直上遺物出土状態
B S F03、S F04
- 図版第11 A S F03
B S F04
- 図版第12 A S F01
B S F01完掘状態
- 図版第13 A S F02上部
B S F02下部
- 図版第14 A 四地状遺構
B Q j - 4 区遺物出土状態
- 図版第15 A M i - 1 区遺物出土状態
B D g - 1 区遺物出土状態

- 図版第16 A S F 01遺物出土状態
B S P 23
- 図版第17 A S P 31・32
B H e・H f 区完掘状態
- 図版第18 A M 8区完掘状態
B M e 2 区完掘状態
- 図版第19 A 層序
B Q j 4 区遺物出土状態
- 図版第20 A 第V層出土土器
B 第V層出土土器
C 左右 第V層出土土器
D 左 第IV層出土土器
右 第V層出土土器
- 図版第21 A 第V層出土土器
B S D 05出土土器
C M f - 21区出土土器
- 図版第22 A D 8 - 1 区出土土器
B 第IV層出土土器
C S F 01出土土器(須恵器)
- 図版第23 A 第V層出土土器
B 第IV層出土土器及び鍋把手

I 調査に至る経過

天神山下遺跡の存在が知られるようになったのは、それほど古いことではない。昭和40年静岡県教育委員会刊『静岡県埋蔵文化財包蔵地地名表』にはまだその名が見られず、清水市北矢部町字竹の下及び沢辺一帯から弥生土器・土師器・須恵器が出土することが知られるようになったのは、昭和40年代に入ってからのものである。清水商業高校郷土研究部の分布踏査や地元の清水東高校生により、完形の小型彩土器が出土したことが清水東校郷土研究部に報告されたりしたのはこの時期である。昭和46年、杉山満氏により『静岡県埋蔵文化財包蔵地調査カード』（清水地区）作成のための分布調査が行なわれ、初めて天神山下遺跡が注目された。当時は遺跡の分布範囲も定かでなく、ミカン畑や水田等の耕作で表面採集される程度であったため、字竹の下を中心とする地区を第Ⅰ遺跡、字沢辺を中心とする地区を第Ⅱ遺跡と呼称してきた（杉山・中西1978）。第Ⅰ遺跡は土師器・須恵器を、第Ⅱ遺跡は弥生後期土器と土師器・須恵器を出土するとされた。

昭和51年に入り、第Ⅱ遺跡の一部及び第Ⅰ遺跡との中間地域に船越小学校が新設されることになり、清水市教育委員会は清水市郷土研究会に委託して一部発掘調査を実施した。この結果、遺跡はかなり広範囲に及んでいることが予想され、弥生時代中期前葉、古墳時代初期を主体とする弥生時代～古墳時代以降まで、断続的に存在する歴代遺跡であることが確認された（中西1979）。その後、道路側溝工事や畑地の耕作時に、断片的に遺物の出土が報じられ、従来呼称してきた第Ⅰ遺跡・第Ⅱ遺跡は広大な分布を有する同一の遺跡と考えられるようになってきた。

昭和55年になると、天神山下遺跡一帯に土地区画整理事業の計画が知られた。清水市教育委員会では、清水市北矢部土地区画整理組合及び清水市区画整理課と協議に入り、昭和56年度において遺跡の範囲確認及び性格、構造を把握するための発掘調査を実施することを計画した。

発掘調査は、昭和56年度に国及び静岡県の補助を受け、清水市教育委員会が調査主体となり実施した。発掘調査には中西道行（清水市教育委員会）と杉山功（清水市教育委員会）が調査担当者として指導にあたった。発掘の期日は昭和56年9月14日～12月11日まで実施し、調査対象地区約40,000㎡のうち、約1400㎡を発掘した。

II 遺跡の位置、地形及び環境

清水市の南には、駿河湾に面して標高307mの有度山が在る。ドーム状隆起により形成された、地質学上の第4紀更新世、洪積層の丘陵で、清水・静岡の沖積平野に孤立して立っている。山頂は名勝日本平で名高い広い平坦面をなしており、南の一帯には徳川家康ゆかりの久能山がそびえる。平面的には円形の約3分の1が残されたような形をなしている。すなわち、北から西にかけては弧状、南から東は直線状を示している。北麓及び西麓はゆるやかな傾斜地をなして駿河湾に面している。海岸線は強い沿岸流にあらわれ、東へ流れて名勝三保松原で知られる三保砂嘴を形成した。東側斜面は開析が進み、侵食谷が発達している。谷口には扇状地が形成され、縄文時代以来のいくつかの遺跡が立地する。

天神山下遺跡は、有度山の東北麓、弧状の海食崖地形の前面に位置する。地質上は、清水市北矢部



第1図 天神山下遺跡位置および周辺遺跡分布図
 (○印遺物包蔵地、●印古墳・窯跡・経塚)

第1表 有度山周辺遺跡地名表

番号	遺跡名	所在地	地形	時期	出土遺物	備考
1	千手寺遺跡	清水市上原字京塚	扇状地	弥生時代(後期)	弥生土器片	
2	千手寺経塚	〃	〃	〃	一字一石経	昭和42年発掘
3	山崎遺跡	〃 有東原字山崎	平地	縄文時代(中期)	縄文土器片	
4	柿木田遺跡	〃	扇状地	古墳時代	土師器片・須恵器片	
5	施田遺跡	〃 今泉字施田	〃	〃	土師器・須恵器	註1 文獻
6	大沢川河床遺跡	〃 船原2丁目	河床	〃	土師器・須恵器・木片	註2 文獻
7	小池遺跡	〃 下渭水町字小池	浜堤	〃 (前期)	土師器・須恵器片	昭和42年発掘、註3 文獻
8	上原1号墳	〃 馬走字上原	扇状地	〃 (後期)		註4・註5 文獻
9	〃 2号墳	〃 馬走字下原	〃	〃 (〃)		
10	上原遺跡	〃 馬走字中原	〃	縄文時代(前期)	縄文土器(木皿式)・打割石斧・石鏃・石磯	註6 文獻
11	瓦ヶ谷窯跡	〃 今泉字瓦ヶ谷	山腹		布目瓦	
12	四通田遺跡	〃 木の下町字四通田	扇状地	弥生時代(中期) 古墳時代	弥生土器(有束式)・土師器・須恵器	註7 文獻
13	今泉I遺跡	〃 今泉字松下	〃	古墳時代	土師器片・須恵器片	註8 文獻
14	〃 II遺跡	〃 今泉字家の上	〃	〃	土師器片・須恵器片	〃
15	馬走1号墳	〃 馬走字蓮華坊	山腹	〃 (後期)	須恵器(甕・轆轤)	註5 文獻
16	〃 2号墳	〃	〃	〃 (〃)	須恵器(甕)	〃 横穴か?
17	天神山下遺跡	〃 北矢部町字沢辺外	扇状地	弥生時代(中期) 古墳時代(前・後期)	弥生土器(丸字式)・土師器・須恵器・土鏃	昭和51年発掘、註9 文獻
18	宅地通遺跡	〃 南矢部町字宅地通	〃	古墳時代	土師器片・須恵器片	

番号	遺跡名	所在地	地形	時期	出土遺物	備考
19	妙音寺遺跡	清水市緑ヶ丘町字反田	扇状地	弥生時代	木製品・石鏝	
20	天神山窯跡	宮加三孝谷津原	◇			
21	天王山遺跡	宮加三孝天王台	◇	縄文時代(後・晩期) 弥生時代(中期)	縄文土器・弥生土器・石器・土製品・石製品	昭和28・27・28・49・51年発掘 集積地、延10・延11文獻
22	天王山北遺跡	宮加三孝欠崎・猿肌	◇	縄文時代(後・晩期)	縄文土器片・打製石斧	
23	天王山東I遺跡	宮加三孝天王台	◇	◇ (中期)	縄文土器片	
24	◇ 東II遺跡	宮加三孝カミ上の坪	◇	古墳時代	土師器片	
25	◇ 西I遺跡	宮加三孝天神前	◇	縄文時代 古墳時代	縄文土器片・土師器片・須恵器片・石斧	
26	◇ 西II遺跡	宮加三孝山下	◇	古墳時代	土師器片・須恵器片	
27	◇ 南I遺跡	駒越字沼田	◇	縄文時代(中期・晩期) 古墳時代	縄文土器片・土師器片・須恵器片・打製石斧	
28	◇ 南II遺跡	駒越字畠下	◇	古墳時代	土師器片・須恵器片	注12文獻
29	◇ 南III遺跡	◇	◇	縄文時代(中期) 古墳時代	縄文土器片(甕・鉢・土師器・須恵器・土師器片・打製石斧) 土師器片・須恵器片・打製石斧	注12・13文獻
30	◇ 南IV遺跡	増字道中山	◇	古墳時代	土師器片・須恵器片	
31	殿沢1号墳	駒越字殿沢窪	山 稜	◇ (後期)	須恵器(坏蓋・埴・埴)・刀子・鉄鏝・直刀	昭和36年発掘・横穴式石室 注14文獻
32	◇ 2号墳	◇	◇	◇ (◇)	須恵器(蓋)・金環	昭和54年発掘・横穴式石室
33	◇ 3号墳	◇	◇	◇ (◇)		
34	◇ 4号墳	◇	◇	◇ (◇)		
35	◇ 5号墳	◇	山稜斜面	◇ (◇)	須恵器(坏)・金環・丸玉・土字鏝・刀子・鉄鏝	昭和54年発掘・横穴式石室
36	◇ 6号墳	◇	◇	◇ (◇)	須恵器(蓋・坏)・刀子・鉄鏝	◇
37	日本平遺跡	馬北字人段	山 稜	先土器時代 縄文時代	ワイタコアール・ポイント・打製石斧・石鏝	注4・6・15文獻

町字竹の下、天神山ほかにあたる。遺跡の南側には市員約4mの大沢川が東から西に向かって流れている。大沢川は有度山の東北麓に源を発し、南北にぎざまれた谷系に沿って北流し、谷口近くで北東に流れを変え、谷口に小扇状地を形成した後、清水平野の低地を北流して市内の巴川に注ぐ、延長約5.3kmの小河川である。上流部は平常沢谷で、水量は少ないが涸れることはない。遺跡は大沢川の形成した標高約25mの扇状地上に占位している。扇状地は、西から東及び南から北に向かってゆっくり傾斜している。現在の海岸線への最短は、直線にして東へ2.3kmを測る。遺跡の分布範囲は定かでないが、天神山下Ⅰ遺跡・天神山下Ⅱ遺跡・宅地通遺跡の3地点が確認されており、ほぼ径1kmの範囲に所在している。周辺の環境は、数年前までミカン畑及び水田に利用されていたが、近年、市立船越小学校の建築、住宅化が進んでいる。

天神山下遺跡の周辺にはいくつかの遺跡が存在する。南東約2.3kmには、学史上名高い清水天王山遺跡が在り、過去5次にわたる調査の結果、縄文時代晩期前葉を主体とする多くの遺構・遺物が検出されている。また、天王山南Ⅰ～Ⅳ、北、東Ⅰ～Ⅱ、西Ⅰ～Ⅱ遺跡といった縄文時代中期～弥生・古墳時代にかけての天王山遺跡周辺の関連遺跡が確認されている。同じく南東約2.7kmの山陵には、6世紀から7世紀にかけての後期古墳6基よりなる殿沢古墳群がある。北方には縄文時代前期の上原遺跡、弥生時代中期の四通田遺跡、古墳時代の鮎田遺跡、大沢川河床遺跡があり、北東約1.4kmには、浜堤上に立地し、古式土師器を出土する小池遺跡がある。

- 註1. 佐藤秀作 「鮎田遺跡」『鑑』第2号 1978年
- 註2. 〃 「大沢川河床遺跡」同上
- 註3. 望月清仁 「下清水小池遺跡」『鑑』創刊号 1977年
- 註4. 大沢和夫 「有度山塊の考古学的調査」『静岡県郷土研究』第5輯 1937年
- 註5. 杉山 満 「清水近辺の古墳群」『ふうど』第5号 1955年
- 註6. 岸沢長介・加藤明秀 「伊豆、駿河の古式縄文土器と其の伴出石器」『考古学論叢』第5輯
- 註7. 小長井保 「四通田遺跡より採取の遺物」『鑑』第2号 1978年
- 註8. 山梨善一 「清水市今泉第Ⅰ、第Ⅱ遺跡」 同上
- 註9. 中西道行 「天神山下Ⅱ遺跡の調査」『天神山下Ⅱ遺跡・東久佐奈岐5号墳・葉師平3号墳発掘調査報告書』1979年
- 註10. 和島誠一・市原寿文外 「清水天王山遺跡」1960年
- 註11. 市原寿文・杉山 満 「清水天王山遺跡第Ⅳ次発掘調査略報」1975年
- 註12. 小長井保 「天王山南第Ⅱ、第Ⅲ遺跡附近出土の遺物」『鑑』創刊号 1977年
- 註13. 〃 「天王山南Ⅱ遺跡出土の遺物」『鑑』第2号 1978年
- 註14. 内藤 晃 「古代の郷土」『清水市立図書館復興10周年記念清水市郷土資料展覧会目録』1962年
- 註15. 大沢和夫 「駿河国日本平」『考古学論叢』第4輯

Ⅲ 発掘調査の概要

1. 調査区の設定及び調査の方法

遺跡周辺の現況及びこれまでの踏査の結果から、遺跡はかなりの広範囲に及ぶことが予想されたため、調査対象面積約40,000㎡に10m×10mの大グリットの網をかけることにした。原点は調査対象地域の南西端に置き、西側の山裾に沿って、ほぼ北方向に基軸線を定めた。原点より北へA・B・C・D・E……とアルファベット順に大文字で示し、東へa・b・c・d・e……とアルファベット順に小文字で示し座標を組んだ。各グリットは南西端の座標により標記した。Aa・Bb・Ccグリット等である。さらに、これら的大グリットを2m×2mの小グリットに25等分し、西から南へ北の順に1・2・3・4・5……と表記した。従って、各グリットはAa1・Bb2・Cc3……といったように表現した。

調査対象地域内には、ミカンの木や畑地等がかなりあり、原則的には10mごとに2m×2mの小グリットを発掘する方法を用いたが、耕作地をさけてグリットを設定したり、一部トレンチ発掘を試みた。また、遺跡の構造及び遺構の状態を把握するため、グリットを拡張し、平面調査を実施したところもある。なお、表土層の除去には一部機械力を使用した。

調査範囲は東西160m、南北190mに及び、遺跡の北端及び東端を確認することが出来た。

2. 調査の経過

発掘調査は昭和56年9月14日より開始した。遺跡の南西端に基点をすえ、北及び東へ10m×10mの大グリットのポイントを設定し、原則的に2m×2mの小グリットの1区を発掘することにした。

9月18日までにH区より南、g区より西のグリットに茶褐色土の包含層が存在することをつきとめた。遺跡の東西及び南北のセクションを把握するため、9月19日よりHa6区とHc6区間のグリットを拡張し、9月22日までに完掘及び実測、写真撮影を実施した。Hc1区とJc1区間のグリットは9月22日より発掘し、9月30日に完了した。この結果、包含層はHc3区より南に分布することをつきとめた。1c3・4区に径約1mの楕円形のピット及び巾約1.5mの東西に走る溝を検出したため、9月29日より東側のグリットを拡張し、10月19日まで溝を追及した。溝の西側は10月19日より拡張し、10月21日までに完掘した。遺跡の東西セクションの把握は9月28日よりHc1区とHg1区間を掘りはじめ、10月25日に完掘し、実測・写真撮影を完了した。Hg1区に径約50cm前後の柱穴状ピットが数個確認されたため、遺構の性格・分布を把握するため、10月3日よりFg1区からGg5区間のグリットを結び、さらに10月6日よりDg1区からEg5区間のグリットを発掘した。この区に溝及びピットが数個検出されたため、前者は10月7日から、後者は10月16日に遺構の発掘に入った。さらに、Dg9・10区、Eg6～10区、Fg6区を拡張し、遺構を追いかけた。この地点は11月12日に遺構の発掘・実測・写真撮影を完了した。

この間、機械力を導入して、H区より北の地域に水田遺構等の検出を期して、巾約1mのトレンチを数本設定した。この結果、Lg18区～Og18区のトレンチ及びQh23区に茶褐色土層の存在と遺物が発見されたため、10月30日よりM区に2m×2mのグリットを10mごとに東へ設定し、包含層の分布を



第2図 天神山下遺跡地形図

追及したQ区はQ14区から東へ10mごとに、やはり2m×2mのグリットを設定し、11月5日から11月9日まで発掘した。11月11日からは遺跡の東西セクションを取るための未発掘区であったHc11区とHd21区間のグリットを発掘し、11月15日に完了した。11月13日からは、再び遺跡の北東部分の状況の把握につとめることとし、機械力を導入しながらM区及びQ区を部分的に拡張して発掘した。11月20日にM11～8区に2条の溝及びピット群を確認し、11月24日までにこれを完掘・実測・写真撮影した。

Qh区～Qn区は11月23日から機械力を用いて発掘した。この区では茶褐色土層の下に、弥生土器を包含する暗棕色粘質土層の存在が確認され、これを覆土とする遺構もQh7、12区、Qi8、13区、Qk19、23区等に発見されたためこれの検出に努めた。12月1日までにQh～Qk区の遺構の発掘及び実測、写真撮影を終了した。Qe～Qn区は11月30日から包含層の発掘をはじめ、Qm7～10区に発見された溝状遺構、Qe9、13、14区の小穴群の発掘を行った。また、Qn2、3区に灰黒色粘土層の分布が認められ、ここから遺物が出たため、Qn7～10区を拡張し、性格の解明に努めた。12月3日からは、実測、写真撮影を併行しながら調査を進めた。埋めもどし作業は漸次発掘と併行して進め、12月11日完了した。

12月7日までに、包含層、遺構の発掘及び実測、写真撮影を終了し、12月8日から発掘区の精査、全体写真、地形測量等を行ない、12月11日に現場での発掘調査を完了した。

3. 層位の観察及び遺物の出土状態

前述したように、遺跡は有度山北麓の扇状地上に立地しているため、扇状地特有の礫層、砂利層、砂層等が複雑に分布、堆積していた。第5・6図に示したものは、Ha6区～Hg1区北壁及びDg1区～Gg5区西壁セクションで、遺跡の南部地区の東西、南北の層序関係を示している。第7図はQh15区～Qn10区北壁及びQ13区～Q1区西壁セクションで、遺跡の北東部地区の層序を表わしている。

遺跡の堆積状態は発掘区により多少の差はあるが、基本的な層序関係を概念的に示せば第3図のようになる。

	I	表土層	水田及び畑地の耕作土
	II	黄褐色土層	埋土
	III	暗灰色粘質土層	
	IV	茶褐色土層	遺物包含層（古墳時代後期）
	V	暗棕色粘質土層	遺物包含層（弥生時代末～古墳時代初頭）
	VI	暗灰色砂利層	遺跡の基盤となる

第3図 土層概念図

第Ⅰ層は水田及び畑地の耕作土で、暗灰色を呈し、約25～30cmの厚さを測る。東及び北へ行く程厚くなり、Ha6区では約25cm、Hg1区では約50cmを測る。

第Ⅱ層は黄褐色土層で、調査区に一樣に堆積する。自然堆積ではなく、旧畑地を水田化するさいの2次的な埋土と思える。下部には礫が多く含まれる。約20～30cm程の厚きであるが、北に行くに従い厚くなる。

第Ⅲ層は暗灰色の粘質土層で、20cm前後の厚さを測るが、北に行くほど稀薄になり、堆積が認められないところもある。

第Ⅳ層は茶褐色土層で、遺跡の主体となる遺物包含層である。古墳時代及びそれ以後の土器を含む。厚さは所により多少異なるが、20～30cm前後を測る。遺構は多く、この下部より切り込まれている。下部に礫を含む。

第Ⅴ層は暗褐色粘質土層である。弥生土器及び古式土師器を含む包含層で、遺跡の北東部地区に分布の主体をみる。厚さは約15～20cmを測り、部分的に第Ⅳ層の下層に堆積する層序関係を認めることが出来る。

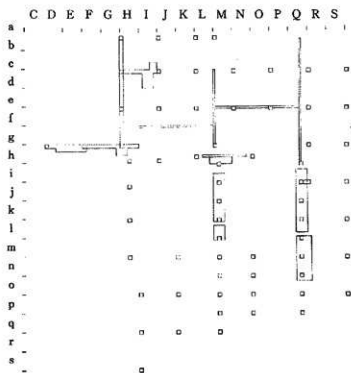
第Ⅵ層は暗灰色砂利層で、遺跡の基盤となっている無遺物層である。遺跡の全域に堆積すると思われるが、第Ⅴ層との間に所により砂層及び褐色砂利層が入り、断面観察では検出されないところもある。

第Ⅶ層以下は粘土層、砂利層、砂層が堆積する。

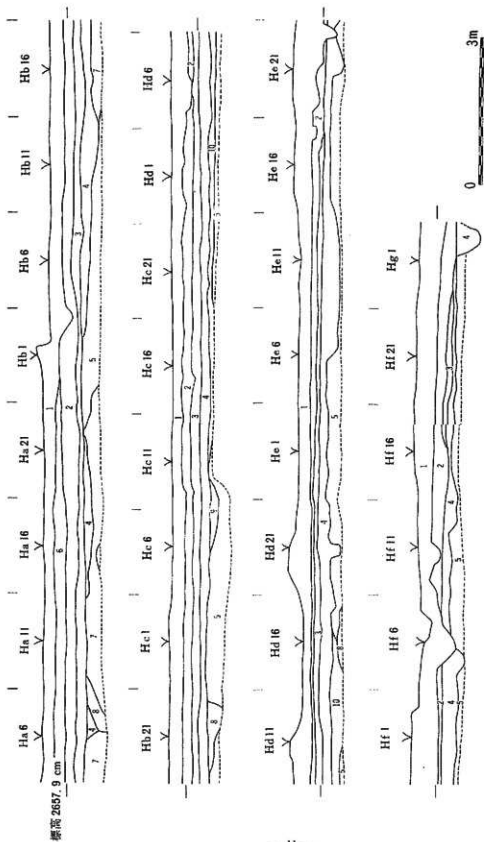
遺跡の北東部地区、Qn8区の南の

部分には、第Ⅳ、Ⅴ層の代わりに黒灰色粘土層が存在し、ここから遺物が出土した。Qn8区より北及び東には認められないが、南から西の地域には広がるものと考えられるが、分布範囲を十分に確認するまでには至らなかった。

遺物の出土量はそれ程顕著ではなく、集中的傾向も認められない。分布状況としてはH区より南では土師器、須恵器を出土し、Mc～Qe区より東では弥生後期～古式土師器の時期を主体とする土器群が出土した。全体的にみれば、遺跡の存在は調査対象区の南部地区と北東部地区に2分される。検出された遺構は2地区に差異はない。

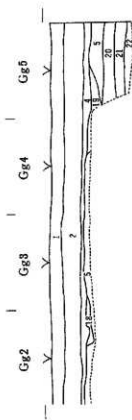
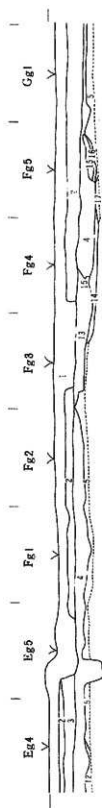
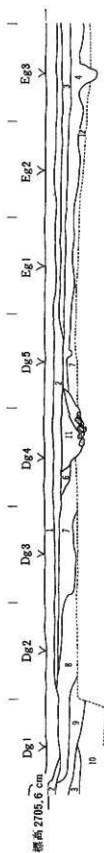


第4図 グリッド配置図



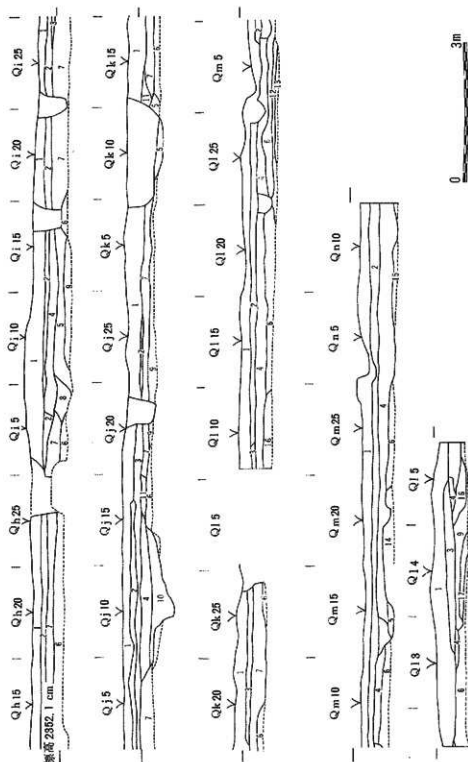
1. 表土
2. 黃褐色土層
3. 暗灰色粘質土層
4. 紫褐色土層
5. 暗棕色砂粘層
6. 暗黃褐色土層
7. 褐色砂粘層
8. 暗灰色砂層
9. 褐色砂質土層
10. 褐色粘質砂層

第5圖 天神山下遺跡土層圖(1)



1. 表土 2. 黄褐色土層 3. 暗灰色粘質土層 4. 紫褐色土層 5. 暗灰色砂粘層 6. 暗青灰色砂質土層
 7. 淡灰色砂層(礫を含む) 8. 黄灰色礫層 9. 褐色砂粘層 10. 灰色粘土層 11. 暗茶褐色土層 12. 黄褐色砂礫層
 13. 暗灰褐色土層(礫を含む) 14. 暗ノ色粘質土層 15. 黄褐色粘土層 16. 茶褐色砂層 17. 暗青灰色砂層
 18. 暗茶褐色砂質粘土層 19. 淡褐色砂層 20. 亚棕色粘土層 21. 黑灰色砂粘層 22. 暗褐色礫層

第6圖 天神山下遺跡土層圖(2)



- | | | | | | |
|-----------|------------|------------|------------|------------|-------------|
| 1. 表土 | 2. 黄褐色土層 | 3. 暗灰色粘質土層 | 4. 茶褐色土層 | 5. 暗褐色粘質土層 | 6. 暗灰色砂粘層 |
| 7. 黄灰色土層 | 8. 暗灰色粘質砂層 | 9. 青灰色砂層 | 10. 暗茶褐色土層 | 11. 褐色粘土層 | 12. 黄灰色粘質砂層 |
| 13. 褐色砂粘層 | 14. 褐色砂面層 | 15. 淡褐色砂層 | 16. 暗青灰色砂層 | 17. 暗褐色粘土層 | |

第7圖 天神山下遺跡土層圖(3)

IV 遺 構

検出された遺構は、溝状遺構、小穴群、土壁に大別される。内訳は、溝状遺構11本、小穴群4ヶ所、土壁4基、それに性格不明の凹地状遺構がある。発掘調査が確認調査主体であるため、遺構の全体を検出したのは溝状遺構1本、土壁2基にすぎない。以下遺構別にその概略を示してみる。

1. 溝状遺溝 (第8,9,10, 12図)

Ib24~Ic13区 (SD01)、Eg1~4区 (SD02, SD03)、Fg4区 (SD04)、Gg2区 (SD05)、Mi1~8区 (SD06, SD07)、Qi7~15区 (SD08)、Qi19区 (SD09)、Qi13~Qj10区 (SD10)、Qm7~10区 (SD11) に発見された。

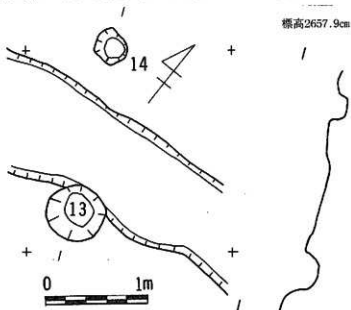
ほぼ全形を知りえたのはSD01のみで、他は部分的な検出である。図示した遺構はSD01, SD02, SD03, SD05, SD06, SD07である。

SD01は、全長約11.5mの短い溝で、東西方向へわずかに蛇行して走る。巾約1~1.5m、深さ約35cmを測る。溝底は平坦で、西に向ってわずかに傾斜しており、自然地形とは逆行している。溝の覆土は暗土色の砂質粘土であるが、この地区は包含層の茶褐色土層が失われているため、黄褐色土層の下部より切り込んでいる。

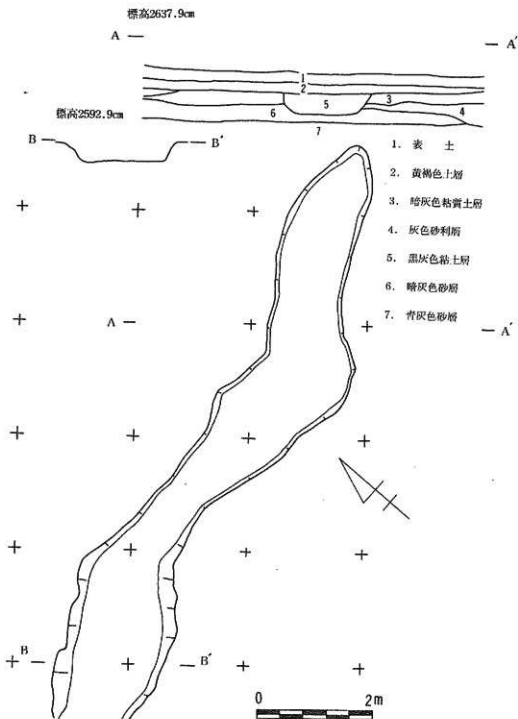
SD02及びSD03は、後述する小穴群 (SP01~SP12)、土壁 (SF02) と近接して存在している。共に巾30~40cmの細い溝で、深さはSD02が約15cm、SD03が約10cmと浅いが、V字状に比較的鋭く掘り込まれている。東へ開いた弧状を呈し、小穴群、土壁との伴出関係は認め難い様相を示す。

SD05は、東西方向に走る巾約80~100cm、深さ8cmの浅い溝である。覆土は茶褐色砂質粘土で、古墳時代後期の土師器を包含する。壁は斜めに切られ、溝底は平坦である。SP13・14が両側に存在するが、関係は不明である。

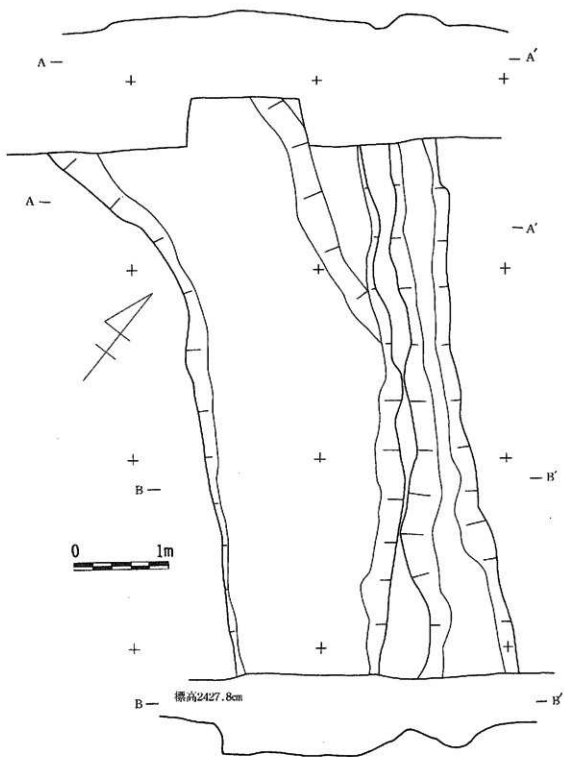
SD06, SD07は、南北方向に平行して走る2条の溝で、SD06は巾約1.5~2.2m、深さ30cmを測り、北端のMi3区で西へゆっくりと曲折する。SD07は、巾40~100cm、深さ15~20cmを測り、ほぼ直線状を呈し、南にゆくほど広がる。壁はともに斜めに切られるが、SD06の西壁は直線的に掘られている。覆土は暗土色粘質土で、古土土師器の土器を出土する。



第8図 SD05実測図



第9圖 SD01實測圖



第10圖 S D06・S D07実測圖

2. 小 穴 群 (第11、12図)

小穴は全てで36基発見されている。いずれも径50cm前後の円形又は楕円形を呈するもので、発見順にS P 01～S P 36と仮称した。このうち、4地点において複数の小穴が群として検出された。

図示したのはEg2～5区(S P 01～S P 12)とGg5・10、Hg1・2・6区(S P 15～S P 20)で検出されたものである。

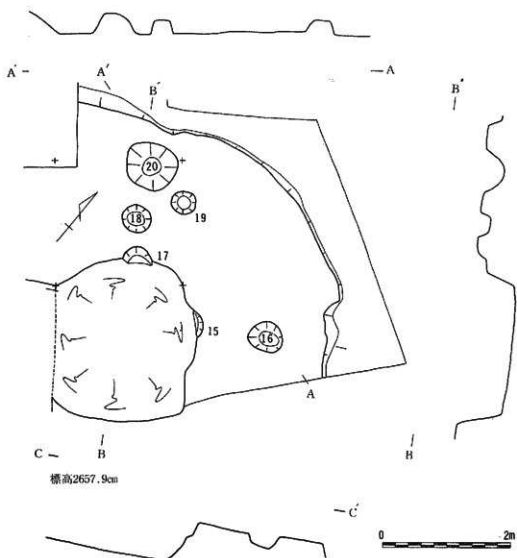
形態的には円形又は楕円形のピットであるが、調査範囲内においては特別な配列関係は観察されなかった。S P 15～S P 20は径約2mの方楕円形にめぐる可能性もあるが、周辺の攪乱及び小範囲内での検出であったため、それ以上の追求は出来なかった。他の遺構との関連も認められなかった。各ピットの計測値は以下のとおりである。

第2表 ピット計測値

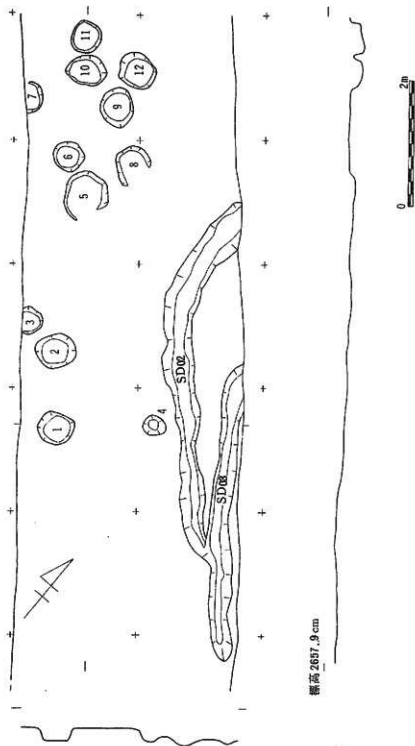
() を付したものは現存値を示す。

番号	発掘区	長 径 cm	短 径 cm	深 cm	ブ ラ ン	壁	底	出土遺物
1	Eg 2	55.5	49	19	楕 円	斜	平 坦	
2	Eg 3	60	52.5	17	◇	◇	不整重	
3	◇	44.5	(31)	36	円	◇	V	有
4	Eg 7	38	31.5	17.5	楕 円	◇	皿	
5	Eg 4	(80)	78.5	9	◇	◇	◇	
6	◇	49.5	48	21	円	◇	◇	有
7	Eg 5	48	(22)	41	楕 円	斜及び垂直	平 坦	
8	Eg 4・9	(55)	55.5	—	◇	—	—	
9	Eg 5	64.5	53	25	◇	斜	平 坦	有
10	◇	66	45	17	長楕円	◇	皿	
11	◇	50	44	18	楕 円	垂 直	不整平坦	有
12	Eg 5・10	61	51.5	21	◇	◇	平 坦	有
13	Gg 2	59	55	27	円	斜	皿	
14	Gg 2・3	36	33	15	不整円	◇	平 坦	
15	Gg 10	(43.5)	—	27.5	楕 円	◇	皿	
16	◇	54	46.5	21	◇	◇	平 坦	

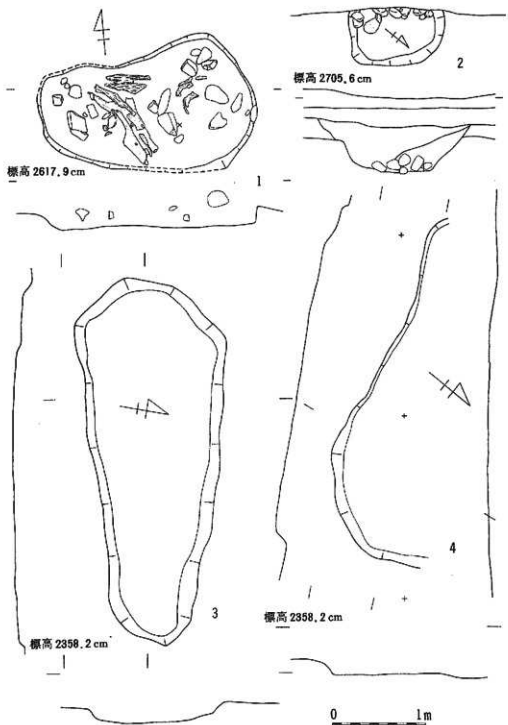
番号	発掘地	長径	短径	深	プラン	壁	底	出土遺物
17	Hg 1	—	41.5	16.5	楕円	斜	皿	
18	◇	46	41.5	18	円	◇	平坦	
19	Hg 1・6	38.5	35	22.5	◇	◇	◇	
20	Hg 1・2	79	71	33	楕円	◇	皿	



第11図 SP 15~20実測図



第12図 SD02・SD03・SP01～SP12実測図



第13図 土壌実測図

3. 土 壌 (第13図)

1c 4・9区 (SF01)、Dg 4区 (SF02)、Qh 4・5・9・10区 (SF03)、Qh 13・14・18・19区 (SF04) に各1基の計4基の土壌が検出された。

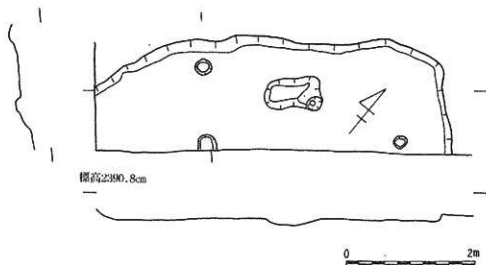
SF01はSD01と重複している。長軸をS-92°-E方向に向けた、長楕円形を呈する。径235cm×114cm、深さ23cmを測る。壁は斜めに切られるが、東壁は垂直になる。底部は平坦で、内部に河原石及び木の根株が入り、須恵器及び土師器を出土する。

SF02は全体を知ることが出来なかったが、楕円形を呈し、やはり内部に河原石が多数置かれている。河原石は上面及び底面に存在する。径104×(64)cm、深さは60cmを測る。壁は斜めに掘り込まれ、底部は若干の丸みをおびる。少量の土器片を出土するが、型式を認定するには至らない。

SF03、SF04は近接して存し、平面形態も砲弾状を呈し、類似している。長軸方向は全く逆位し、SF03がS-76.5°-E、SF04がS-98.5°-Wと対置する関係を示す。SF03は北半を擾乱により欠失しているが、径380×(100)cm、深さ18cmを測り、壁は斜めに切られ、底部は平坦である。SF04は全形を知ることができ、径400×110cm、深さ23cmを測る。壁は斜めで、底部は平坦である。

4. 凹地状遺構 (第14図)

Qh 8・13・18区にかけて、暗灰色砂利層を切って暗棕色粘質土の落ち込みが認められた。平面プランは、北東隅が直角に近く曲がり、北側のラインが大きく弧を描くようになる。辺約5.5mの方形状プランに近い。深さは10～15cm程で、底は平坦になる。底には3個の、径20～30cmの小ピットが認められ、中央やや北よりには45×90cmの方形のピットがある。ピットの深さはいずれも10cm前後のものである。住居址状の落ち込みであるが、これを積極的に認める資料は得られなかった。



第14図 凹地状遺構実測図

V 出土遺物

発掘調査により出土した遺物は土鍾1点、木製品数点を除き、他は全て土器片である。土器には弥生土器・土師器・須恵器がある。主体となる遺物包含層は第Ⅳ層及び第Ⅴ層で、遺物の大半はここから出土した。遺構からの出土はいずれも小破片で、量的にも少ない。

以下、第Ⅳ層、第Ⅴ層及び主な遺構から出土した遺物について、記述してみる。

1. 第Ⅴ層出土土器 (第15、16図1～19)

多数の遺物が出土したが、その大半は弥生時代後期後半～古式土師器とされる時期のもので、古墳時代中葉以降の土師器及び須恵器は含んでいない。

図示した資料のうち、1～16は全てQi区出土のものである。17～19はMi6区出土で、S D07直上の一括資料である。

器種は壺形土器、甕形土器、高杯形土器に限られる。

1、2は複合口縁をなす中形の壺形土器で、口縁は斜め上方に開き、下部に2段の稜をもつ。器外面は口縁部を斜めのハケ、頸部を縦のハケ整形し、1はヘラ磨きが施されている。内面は粗いハケ整形が施される。1の口唇部は平坦につくり、口径は15.6cmを測る。2は口縁部に縦の2条の沈線が施される。口縁端部を欠失しているが、口径は20cmを越えない。

3、4は折り返し口縁の土器で、3は胴下半を欠失しているが、器高15cmを越えない小形のものである。折り返し部に軽い指頭押捺が加えられる。頸部は短く、弱い稜をなして胴上部につながる。最大巾は胴中央にあり、11.1cmを測る。口径9.4cm。器外面は磨滅のため調整は不明であるが、内面は粗いハケ整形が施される。4は口縁が折り返し部で外側に屈折し、断面三角形形状を呈する。口唇部は平坦で、1本の棒状隆起文を6ヶ所貼付する。器内外面とも細かいハケ整形が施される。口径20.8cm。

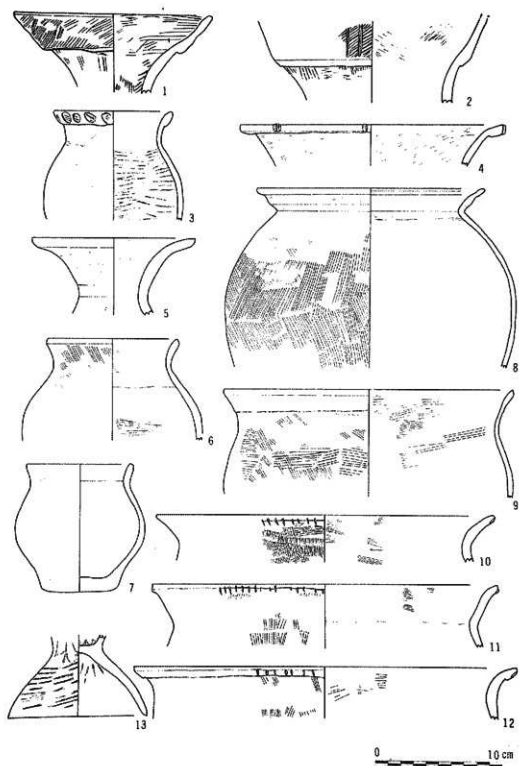
5、6は単口縁の壺形土器で、5は短く細めの頸部から大きく外反する口縁をなす。端部に弱い稜がつき、口唇部は細く尖る。頸部も弱い稜をもって胴部へつながる。器外面は細かいハケ整形後、ヘラ磨きが施される。口径13cm。6は小形の土器で、胴中央以下を欠いているが器高20cmを越えないものと思われる。口縁は短く緩やかに外反する。器外面は口縁部が斜めのハケ整形が施され、頸部から胴上部はヘラ磨きが施される。内面は横のハケ整形が施され、胴上部には接合痕が観察される。口径10.2cm。

7は小型壺で、口縁は緩やかに小さく外反し、頸部はあまりすばまない甕に近い形態をとる。最大巾は胴中央にあり、やや張り出す。器内外面とも横のハケ整形が施されるが、磨滅のため調整は不明。胎土に大きめの小石を多数含んでいる。口径8.2cm、器高10.1cm、底径5.8cmを測る。

8～12は甕形土器の胴上部片である。8は口縁をS字状に屈曲させるS字状口縁付甕形土器で、口縁端部を丸くおさめている。肩部の整形が不明であるが、器面は斜めのハケ整形が施される。口径28cmを測る。

9は口縁部が緩やかに外反し、薄く折り返している。器内外面ともハケ整形が施される。口径23cm。

10～12はいずれも口縁に縦の細く鋭い刻み目が施される大形の甕形土器である。10は口縁が大きく



第15图 第V层出土土器实测图

外反し、器内外面とも細かいハケ整形が施される。口径25.7cm。11は別い「く」の字形に折れる口縁で、線形に近い胴を持つと思える。器外面は縦の粗いハケ整形を施す。口径27.4cm。12は口縁が折り返され、緩やかに外反する。器内外面とも粗いハケ整形が施される。口径30.2cm。

13は高環形土器の胴部と思われる。胴は大きく内湾して広がり、裾部は薄く尖る。器外面は粗いハケ整形。内面はナデ調整され、しぼり目が残る。胴部との接合部は指頭痕が明瞭に残る。

14～16は変形土器の台部で、14、16は小形のものである。14の台は直線的に大きく開く。15は内湾気味に広がり、裾部を丸くおさめる。器外面は粗い斜めのハケ整形が施され、台部上端からススが付着している。16は台上部で外反し、下部は内湾気味に広がる。器外面は粗いハケ整形が施されているようだが、磨滅のため調整不明。

17～19は一括資料であり、17は折り返し口縁の変形土器である。折り返し部下端がわずかに屈曲し、弱い稜がつく。頸部に断面三角形の大きな突帯が貼付される。器内外面とも細かいハケ整形が施されるが、磨滅のため調整不明。口径13.3cm。18は変形土器で、口縁は短く、鋭く屈曲して外反する。内面に段がつく。器外面は粗いハケ整形が施される。口径21.6cm。19は変形土器の台部で、やや内湾気味に広がる。器外面は磨滅のため調整不明。内面は粗く、明瞭なハケ整形。

2. 第Ⅳ層出土土器 (第16図20～27)

遺物の出土は顕著であるが、小破片が多く、図示できるものは少ない。時間的には須恵器を伴出する古墳時代後期を主体とするが、第Ⅴ層出土土器に共通する時期のものも含んでいる。

20～22は第Ⅴ層出土土器と分離し難い時期のものである。20、21は壺形土器の上胴部片で、20は「門」形の竹管文による刺突やへら状器具による弧線文、飾画の波状文・横線文が施文される。22は高環形土器の胴部で、円錐状に開き、3孔を穿つ。器内外面ともハケ整形が施されるが、磨滅のため調整は不明。

23、24は土師器の環形土器である。23の口縁は垂直に近い立ち上りを示し、明瞭な稜をもつ。口径8.2cm、器高3.7cmとやや小形である。24は体部が低く、弱い稜をもって内湾気味に外反する口縁をもつ。端部は細く尖る。口径11.3cm、器高3.5cm。共に磨滅が激しく、調整は不明である。色調は赤褐色を呈する。

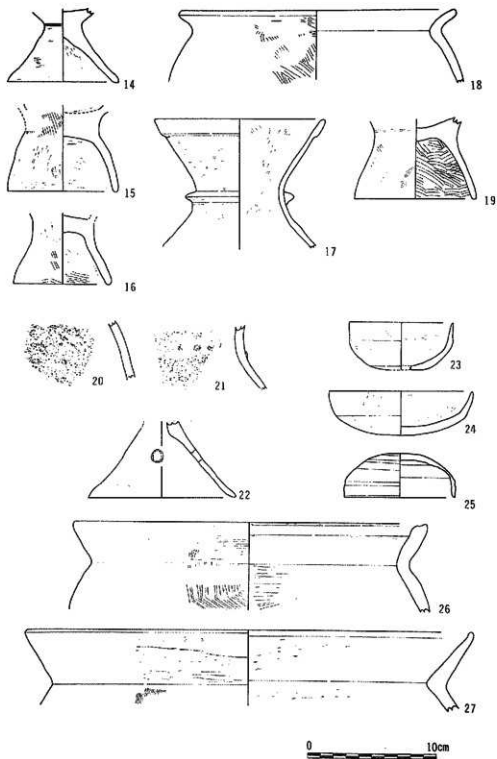
25は須恵器の坏蓋である。天井部から体部にかけては彎曲し、口縁部は直線的になる。体部との境に明瞭な沈線が入る。口径に比して器高はやや高い。口径8.8cm、器高3.5cm。

26、27は変形をなすもので、口縁部は胴部から「く」の字形に折れる。26は口縁部を横位、頸部を縦、胴上部を斜めのハケ整形を施す。口辺にススが付着する。口径28cm。27は口縁部に横位の擦痕を残し、頸部は縦の細かいハケ整形を施す。端部を内側にわずかに肥厚させている。口径35.6cm。

3. 遺構内出土土器 (第17図28～40)

S F 01 (28)、S D 01 (29～33)、S D 05 (34・35)、S D 06 (36・37)、S D 07 (38～40) 出土のものを図示した。

28は須恵器の坏身で、丸底の底部からゆっくり内湾して立ち上り、受部でわずかに外に開く。体部



第16图 第IV·V层出土土器实测图

と受部の境に沈線がめぐり、立ち上りは弱く多少内傾している。底部はヘラによって削られ、明瞭な稜をなす。口径12.5cm、最大径15.4cm、器高5.2cmを測る。色調は灰色を呈する。

29～32は土師器の坏形土器で、29は直立に近い立ち上りの口辺を持ち、口縁部近くで小さく外反する。口縁部は横ナデによって稜がつくり出されている。器外面はヘラ削りされる。口径12.2cm。30は口縁下部に稜を有する素縁の特徴的な土器である。口径12.4cm。31は口縁部の内湾する土器。32は碗形に近い器形を示し、口縁部を内傾させ、体部との境に稜をつくる。口径13.3cm。33は甕形土器の底部である。器外面はヘラ磨き、内面は細かいハケ整形される。

34は碗形に近い坏形土器で、口辺は垂直に立ち上り短い。器外面はヘラ削りされる。口径14.3cm。35は甕形土器の底部で、器内面は細かい横のハケ整形が施される。

36、37とも中形の甕形土器の胴上半部片である。36は緩やかに外反する口縁をなし、口縁内面に弱い稜がつく薄手の土器である。口縁部は調整のため外側にわずかに、粘土が突き出ている。器外面は細かい斜めのハケ、内面は粗い横のハケ整形が施される。口径21.6cm。37は大きく屈曲して、内面に段のつく口縁をなし、胴は張り出さず長胴をなすと思われる。器外面は口縁部が縦、胴部が横の粗いハケ整形が施され、内面は口縁が横、胴が斜めのハケ整形が施される。口径17.3cm。

38・39は甕形土器、40は甕形土器である。39は口縁を欠失しているが、頸部に断面三角形の突帯を貼付し、その下をヘラ状器具により細い斜線文・横線文を施文する。39は胴上部に竹管文が刺突される。40は大きく緩やかに外反する口縁をなし、口唇部に凹形の小さな縦の刻み目を施す。器外面は斜めの粗いハケ整形される。口径26.6cm。

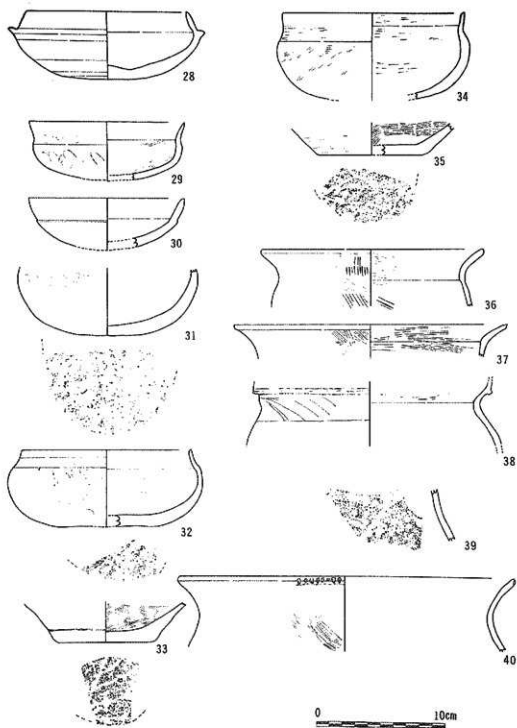
4. 各区出土土器 (第18図41～43)

遺跡の主体となる第Ⅳ層、第Ⅴ層の包含層をはずれた周辺のグリットより、単独状態で数点の資料が出土した。

41はM21区暗灰色砂利層より出土した土師器の坏である。体上部に段を有し、口縁部を内側に折るようにして立ち上らせる。器外面は細かいハケ整形されるが、磨減のため調整不明。色調は赤褐色を呈する。口径12.3cm、最大径13.3cm、器高5.5cm。

42はHa区黄灰色礫層中より出土した甕形土器である。口縁は「く」の字形に外反し、端部はわずかに内湾して、口唇部を内側にやや肥厚する。最大巾は胴中央やや上位に持ち、頸部内面に明瞭な段を有す。口縁部から頸部にかけては厚く、胴上部からは薄手になる。底部はやや上げ底気味につくり、木葉痕を残す。器外面は細かい縦のハケ整形が施され、胴中央より下に一面スグが付着する。内面は斜め、横のハケ整形が施される。口径20cm、器高25.7cm、胴最大巾25.3cm、底径9cmを測る。

43はDg1区褐色砂利層から灰色粘土層にかけて出土した、ほぼ完形の甕形土器である。口縁は鋭く「く」の字形に屈曲し短く、口縁部はわずかに肥厚してつくる。最大巾を胴中央にもち、張り出した形態を呈する。胴中央やや下にわずかな稜をもつ。底部は斜め上方に立ち上り、底面を肥厚させ高台気味につくる。器外面は磨減がはげしく、調整の痕跡は不十分であるが、口縁から頸部にかけては細かいハケ整形後、ヘラ磨きされるようである。胴部は斜めのハケ整形が施される。器形的には甕形に近いが、胴中央から底部にかけてスグが付着し、煮沸用に使われた。口径12.7cm、器高23cm、胴最

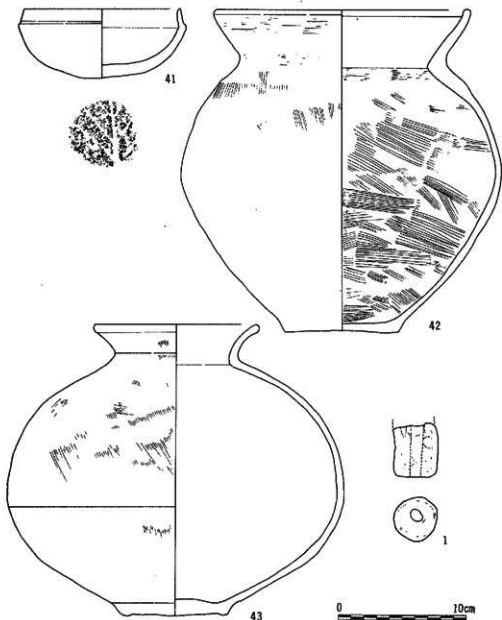


第17図 瀬橋内出土土器実測図

大巾26.5cm、底径8cmを測る。

5. 土 鍾 (第18図1)

Fig5区第V層より1点出土した。約1/4欠損している。円筒状を呈し、中央に孔が貫通している。指頭による整形痕が残る。現存値での長さ4.3cm、巾3.4cm、孔径0.8~1.0cm、重さ42.7gを測る。色調は黄灰色を呈する。



第18図 各区出土土器・土鍾実測図

Ⅵ 考 察

天神山下遺跡発掘調査の概要を示してきた訳であるが、ここでは今回の調査によるいくつかの問題点を整理して、まとめたいと思う。

まず第1に、本調査の主眼であった遺跡の広がりについてである。今回の調査対象地区が予想される遺跡の分布範囲の北半部分であったため、遺跡の分布について十全に把握する訳にはいかなかったが、次の点を指摘することができる。遺跡は現在の大沢川北岸の扇状地上に立地する遺跡で、西端は扇状地の谷口から天神山の裾部に認められる。東端は山裾から約130mの地点にまで認められ、従来までの知見を加味すると扇状地中央で約200mの東西距離を数えることができるから、東端は概ね標高23～24mの等高線に沿って遺跡の存在が確認出来る。遺跡の北端は現在の大沢川より北へ約250mの地点にまで確認され、南端は宅地通過跡あたりまでと推察すれば、遺跡の南北距離は約350m程とすることができる。こうしてみると、天神山下遺跡は扇状地頂点を基点に半径200m程の平円状に遺跡の分布が確認でき、標高23～24mの等高線に沿って扇形に広がっていることが推察される。むしろこれは現在確認しえる遺物、遺構の分布から押し出したもので、予期される水田遺構等はこれを上回るものとなろう。また、遺物、遺構は出土地点により、それぞれ時期差も認められ、扇状地一帯にまんべんなく遺物、遺構が検出される訳でなく、各地点間の断絶も認められる。

第2は遺跡の継続年代についてである。これまでの調査によれば、弥生時代中期前葉及び古墳時代初期の時期を主体とすることが知られていたが、今回の調査では古墳時代初期の時期と併に後半の時期を主体とする遺物が多く検出された。特に前者は今回の調査区の北東地域、後者は南部地域と大きく2分されることから、古墳時代初期にかけては扇状地の末端地域に、古墳時代後半は扇状地の扇央部にその基盤を置いていたと考えることができる。

第3に出土した遺物の時間的位置づけについてであるが、今回の調査では大きく2群に大別される土器群を出土した。第Ⅰ群は古墳時代初期に編年される土器群であり、第Ⅱ群は古墳時代後期、6世紀後半から7世紀前葉にかけての時期である。

第Ⅰ群土器に類似する資料を市内に求めるとすれば、飯田遺跡、宮平Ⅱ遺跡、寺崎Ⅰ遺跡等をあげることができる。第Ⅰ群土器の壺形土器の複合口縁は、立ち上がりが弱く、斜め上方に広がる傾向が強く、口縁部に貼付される棒状隆起文も細く短いものが目立つ。また口縁部が大きくラップ状に外反するものも少なく、折り返し口縁の断面三角形に整形される資料もわずかになる。飯田遺跡出土土器は時間的に中をもっているが、天神山下遺跡第Ⅰ群土器は、従来「飯田式土器」と呼ばれてきたグループよりは後出の要素が強い。また、壺形土器の頸部に凸帯を持つ例は、尾張の山中中期以降、普遍的に見られるが、比較的薄手のつくりで外反度が弱く、長くまっすぐのにのびる口縁部は元尾敷期のそれと共通性を見る。壺形土器に施文される竹管文、波状文、横線文も各地で古式土器期の時期にまで残存することが認められている。甕形土器は、口縁部が強く「く」の字形に屈折する例は見られず、緩やかに外反するものや弱い「く」の字形を呈するものが多い。口縁部に付される刻み目も後出の要素といえるが、なお弥生的なものといえよう。S字裏は大きく外方に広がる口縁の端部が丸くおさまられ、安達分類のⅢ類にあたる。こうしてみると、第Ⅰ群土器は概ね寺崎Ⅰ遺跡に併行する時期と

考えられ、従来天神山下遺跡より出土している資料よりは若干古手のものと考えられるがなお検討の余地があると思う。

第Ⅱ群土器については比較検討する資料に乏しい。SF01より出土した須恵器坏は、東久佐奈岐5号墳出土のそれに類似し、近くでは静岡市賤機山古墳出土資料がある。従来の静岡県内の須恵器編年第Ⅲ期中葉に置かれよう。また第Ⅳ層出土の須恵器坏蓋は、径9cm前後と小型化したもので藤枝市瀬戸5号墳出土資料に近い。土師器については比較する資料に乏しいが、坏などの特徴から関東地方鬼高式土器の新しい時期に比定されよう。第Ⅱ群土器はかなりの時間的巾をもっているが、大きく6世紀後半から7世紀前半の時期を考えたい。

検出された各種遺構については、遺物の出土も少なく、部分的な調査のため、全貌が明らかにされた訳ではなくその性格を明らかにするまでには至らない。ただ、有度山東麓の小扇状地上に立地する該期の各遺跡群の一つとして、北方の巴川周辺部遺跡群との関連は多くの課題を有している。それは本地域における古墳文化成立の背景をさぐる上において欠くことのできない遺跡の一つであろう。

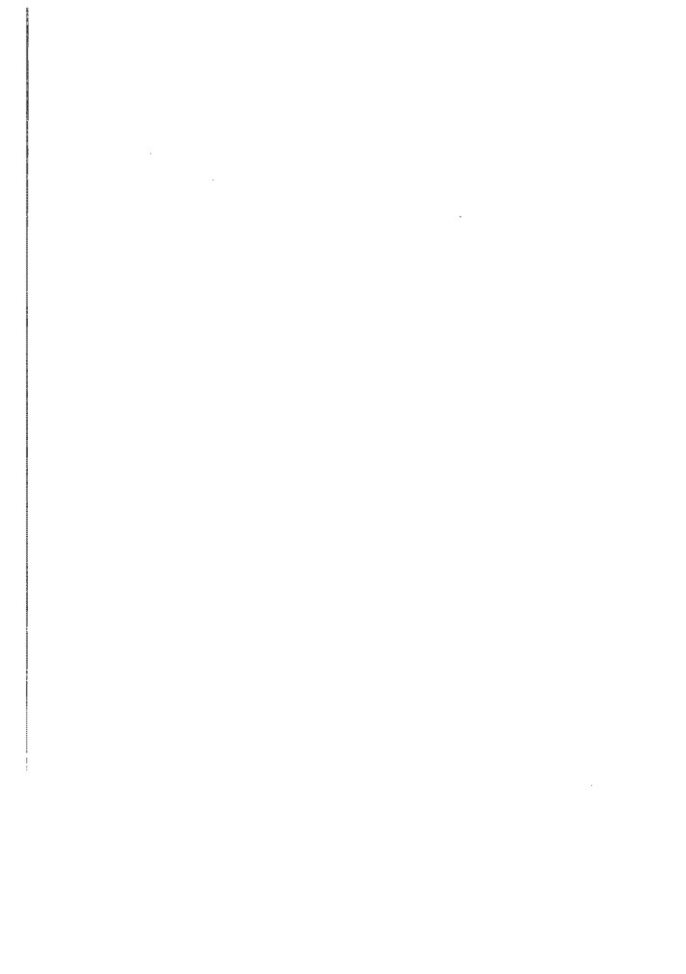
図版第 1



A 遺跡近景（南より）



B 遺跡近景（西より）



図版第2

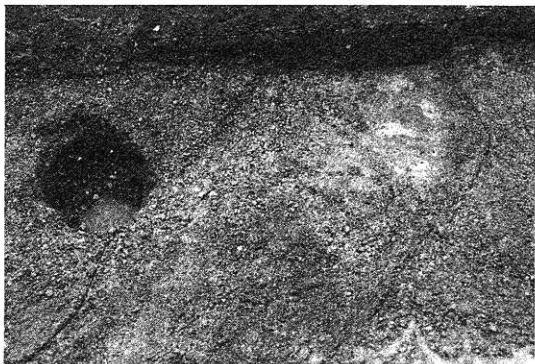


A S D01(東より)



B S D01(西より)

图版第3

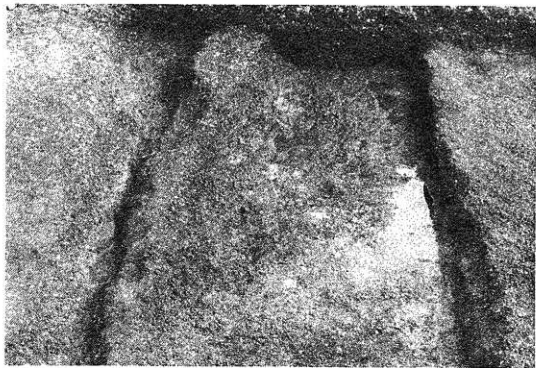


A S D05

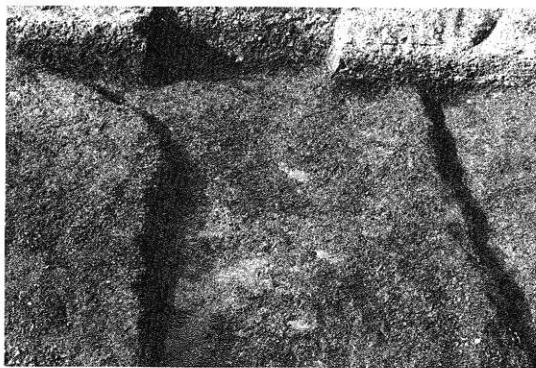


B S D06

図版第 4



A S D06・S D07(南半部)

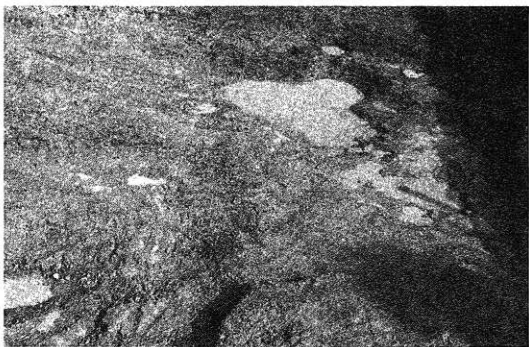


B S D06・S D07(北半部)

图版第 5

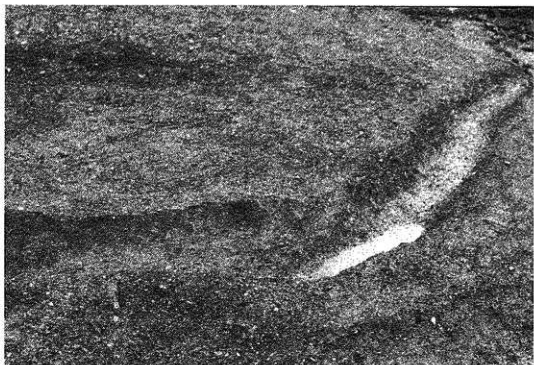


A SD04

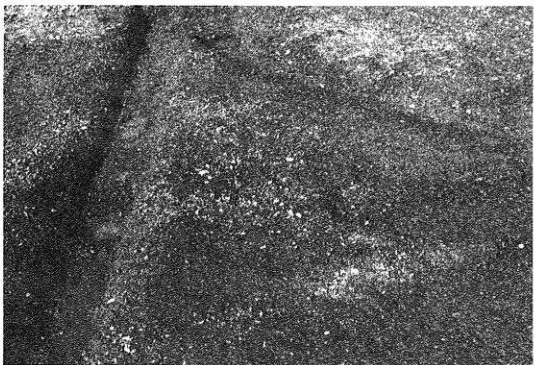


B SD08

图版第 6



A SD10



B SD11



図版第 7



A SD11(北半)

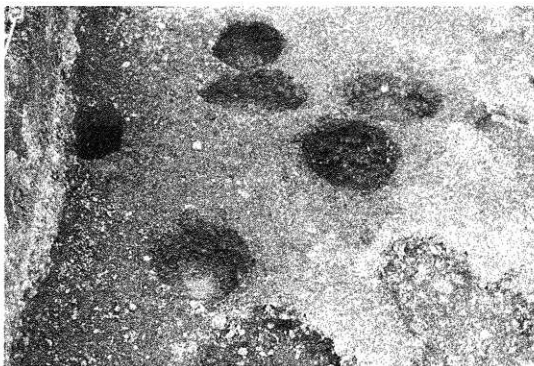


B SP34・SP35

図版第 8



A SD02・SD03・SP01~SP12



B SP05~SP12

图版第 9



A SP17~SP20



B SP21~SP25

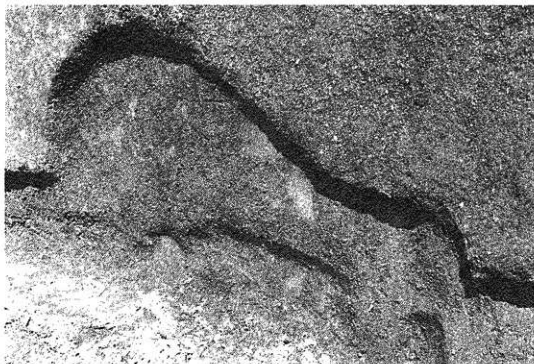
圖版第10



A SP06・SD07直上遺物出土狀態



B SF03・SF04



A SF 03

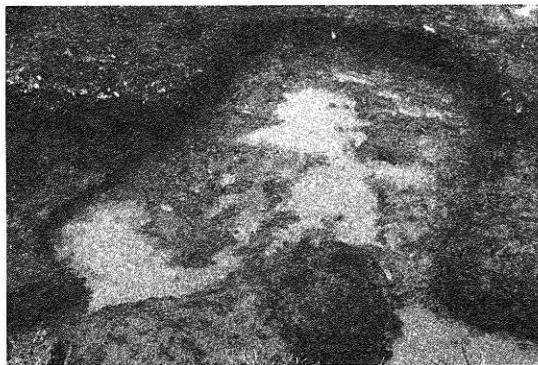


B SF 04

图版第12

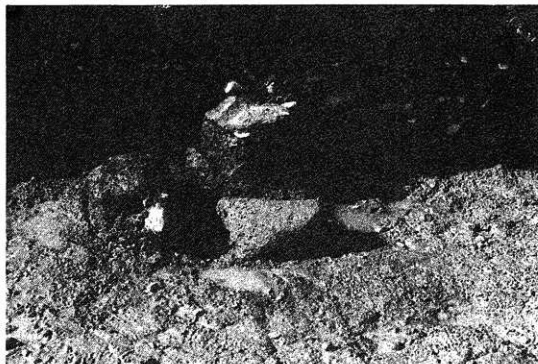


A SF01



B SF01完掘状态





A SF02上部



B SF02下部



A 凹地残積



B Q₁-4区遺物出土土層

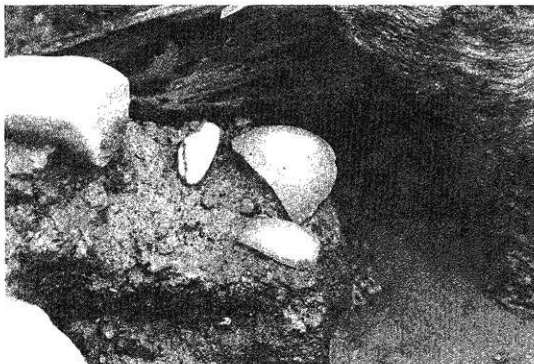
图版第15



A Mi-1区遺物出土状態



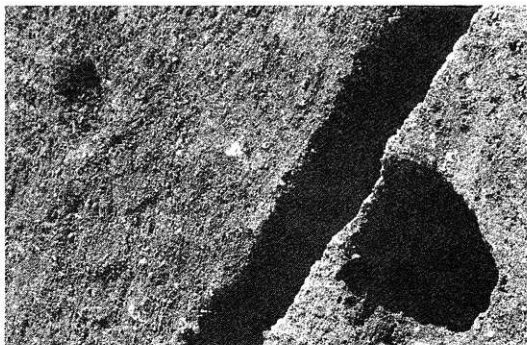
B Dg-1区遺物出土状態



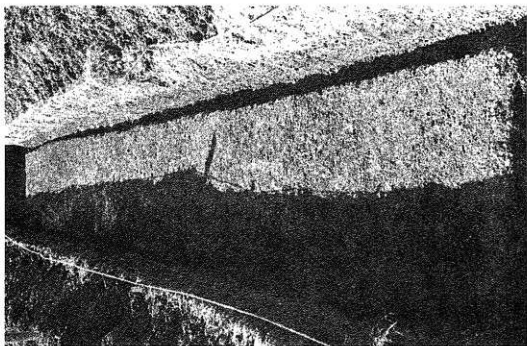
A SF01遺物出土状態



B SP23



Asp



B He Hf 区无垢状能

图版第18



A Mg区完掘状态

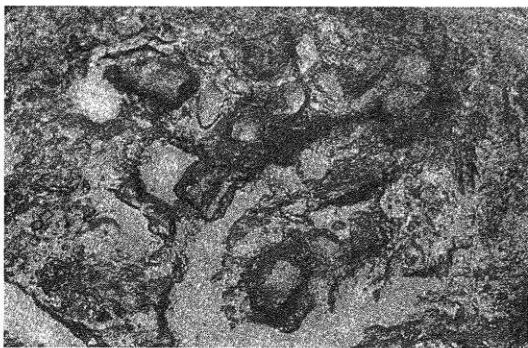


B Me2区完掘状态

图版第19

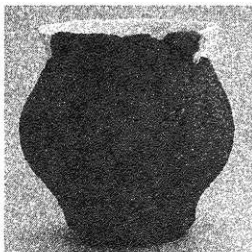


A 层序

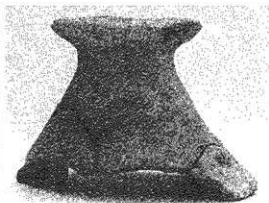


B Qj 4 区遗物出土状态

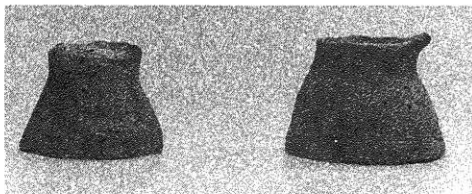
图版第20



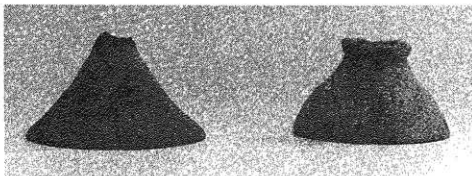
A 第V層出土土器



B 第V層出土土器



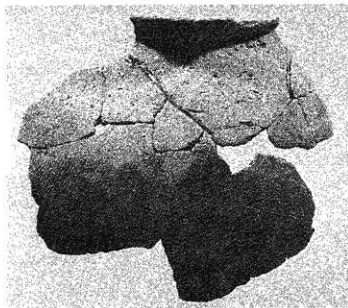
C 左右 第V層出土土器



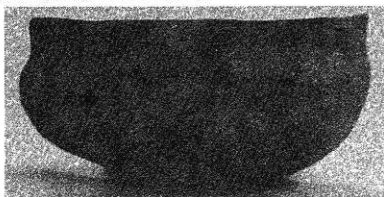
D 左 第IV層出土土器

• 右 第V層出土土器

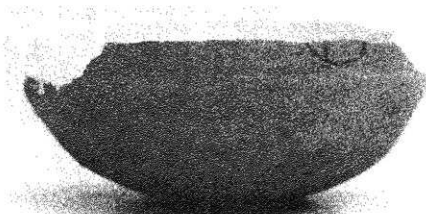
图版第21



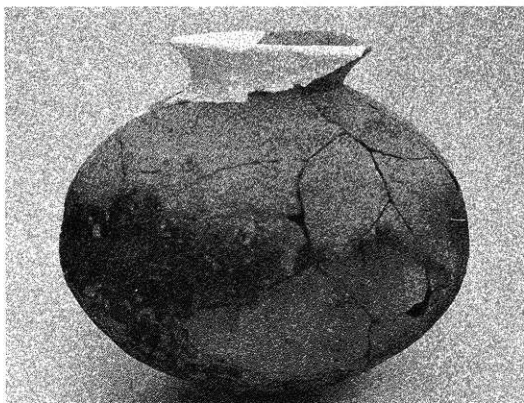
A
第V层出土土器



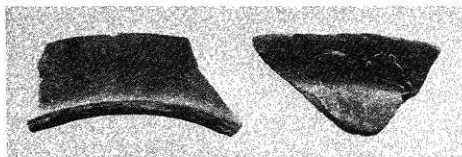
B S D05出土土器



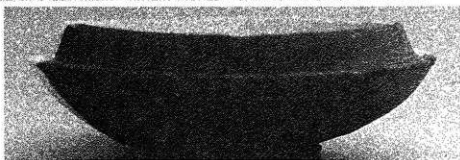
C Mf-21区出土土器



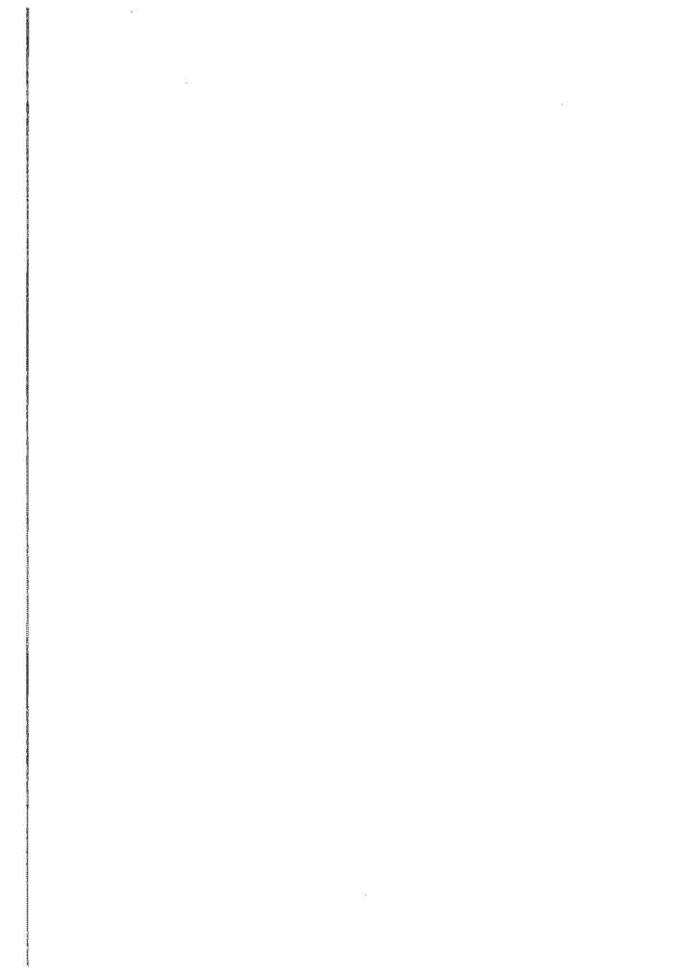
A Dg-1 区出土土器



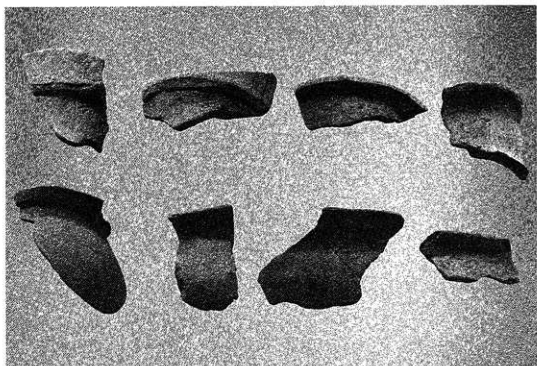
B
第Ⅳ層出土土器



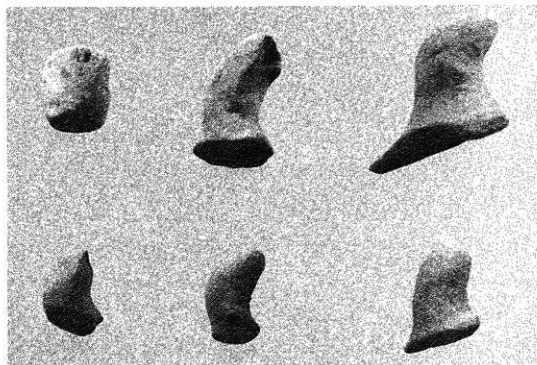
C SF01出土土器 (須恵器)



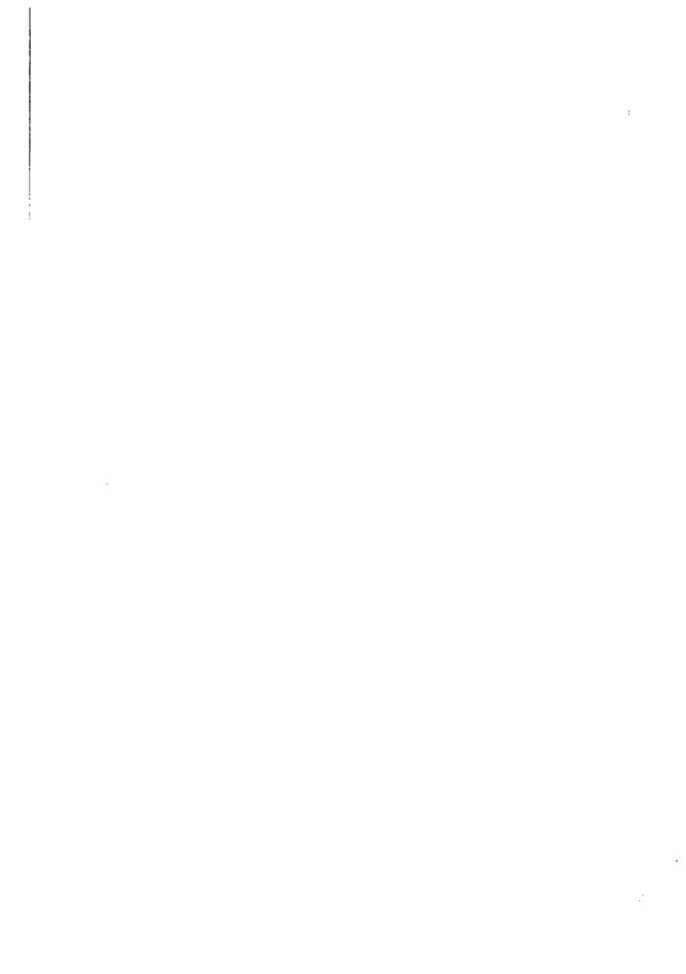
图版第23



A 第V層出土土器



B 第IV層出土土鍾及び鍋把手



天神山下遺跡 I

昭和56年度発掘調査概報

昭和57年3月31日 印刷・発行

編集 清水市教育委員会
発行 清水市郷土研究会
印刷所 タイプセンター印刷社

